

教員及び技術職員の個人評価集計及び分析結果

2005 年度実績

総合情報基盤センター

平成 19 年 2 月

1 個人評価の実施状況

1.1 対象者数、実施者数、実施率

総合情報基盤センター(平成 18 年 2 月に学術情報処理センターから改組)の個人評価対象者数は教員 4 名(教授 1、助教授 1、講師 1、助手 1)及び技術職員 4 名(技術専門職員 3、技術員 1)であり、全員が実施し、実施率 100%であった。

1.2 個人評価の実施概要

平成 18 年度は、平成 17 年度の教員個人評価に加え、技術職員の個人評価を試行した。

センター運営委員会の下に、センター長、副センター長 2 名及び運営委員会委員 1 名から構成される評価専門委員会を設置し、実施した。2006 年度の評価委員は以下の通りである。

只木進一	センター長(総合情報基盤センター教授)
竹生政資	副センター長(医学部教授)
渡辺健次	副センター長(理工学部教授)
加藤 治	運営委員会委員(農学部教授)

実施に当たって、「活動実績報告及び自己点検・評価書」の書式ファイルの配布を行い、各自が記入し、提出した。技術職員についても教員と同一の書式を活用し、「研究教育支援」の観点のみの記入とした。

2 評価領域別の集計・分析と自己点検評価(教員分)

2.1 教育の領域

2.1.1 評価項目毎の実績集計と分析

- 教養教育科目 2 科目、及び学内非常勤としての学部教育科目 3 科目の負担があり、適切に実施している。負担科目数が少ないのは、センターとしての特殊性によるものである。
- 工学系研究科の科目を 5 科目開講し、適切に実施した。

- 教育改善活動として、シラバス公開、講義内容及び教材の Web を通じた公開、例題シミュレーションの公開、演習の実施、ネット授業システムの支援、など全員が取り組んでいる。特に、情報技術を活用した取組が活発に行われている。
- 全教員が卒業研究の指導あるいはその補助を行っている。大学院担当の者は、それぞれに指導あるいはその補助を行っている。修士課程の学生による英文学術誌論文の執筆が特記されている。
- 「その他特記事項」は無かった。

2.1.2 活動評価集計と分析

- 5段階評価の自己評価評点の平均は3.9であった。センターはシステム関連業務を中心としているため教育負担は少ない。負担部分については、適切に実施している。

2.1.3 部局としての自己点検評価

- センターはシステム関連業務を中心としているため教育負担は少ない。負担部分については、適切に実施している。
- 修士課程の学生による英文学術誌論文の執筆が特記できる。
- 情報技術を活用した教育改善の取組が行われている。

2.2 研究の領域

2.2.1 評価項目毎の実績集計と分析

- 全教員が、過去3年間に審査付き学術論文を発表している。10編を超える教員も居る。
- 全教員が、過去3年間に口頭発表論文を発表している。10編を超える教員も居る。
- 講師以上の全教員が、学内他部局及び学外との共同研究を行っている。
- 講師以上の全教員が、科研費への応募など外部資金獲得の活動を行っている。また、継続的に科研費を獲得している教員もいる。
- 多くの教員がセンターの業務と関連した研究テーマを持ち、実績をあげている。
- 「その他特記事項」は無かった。

2.2.2 活動評価集計と分析

- 5段階評価の自己評価評点の平均は4.0であった。センターの業務を生かした研究も行われており、全般としては適切な業績を上げている。
- 科研費をはじめとする外部資金の獲得や、研究業績向上に努力の余地のある教員が見られる。

2.2.3 部局としての自己点検評価

- 各教員の背景となる研究分野及びセンターの業務を生かした研究ともに、全般に適切な研究業績を上げている。
- 業務負担の軽減により、研究活動の活性化を検討しなければならない。
- 科研費をはじめとする外部資金への応募をより積極的に行う必要がある。

2.3 国際・社会貢献の領域

2.3.1 評価項目毎の実績集計と分析

- 全体で2名の留学生を受け入れ、指導している。
- ほぼすべての教員に、過去3年間に1回以上の国際会議参加の実績がある。
- 国際協力・交流事業として、ほぼすべての教員に、JICA 講習への講師としての参加実績がある。
- 学内・国内外の情報化支援として、ほぼすべての教員に取り組み実績がある。
- 学会・学外委員会活動として、ほぼすべての教員に取り組み実績がある。
- 「その他特記事項」は無かった。

2.3.2 活動評価集計と分析

- 5段階評価の自己評価評点の平均は3.7であった。全般として、積極的な活動がみられる。

2.3.3 部局としての自己点検評価

- センター業務と関連して、地域貢献、国際貢献・交流活動が活発に行われている。
- 地域貢献、国際貢献・交流活動に改善の必要な教員がみられる。

2.4 組織運営の領域

2.4.1 評価項目毎の実績集計と分析

- 情報政策委員会、評価室、広報室、ネット授業研究委員会での活動が行われた。
- 講師以上はセンター運営委員である。また、全教員が運用委員として、毎月の運用委員会に参加している。また、それぞれに分担を決め、センターの組織運営に関与している。
- 「その他特記事項」は無かった。

2.4.2 活動評価集計と分析

- 5段階評価の自己評価評点の平均は4.3であった。小さな組織であるため、全教職

員の協力により組織運営を行っている。

2.4.3 部局としての自己点検評価

- 学総合情報基盤センターは小さな組織である一方で、全学の情報基盤を担うという重要な業務を負う組織である。従って、全教職員の積極的活動が不可欠である。

2.5 その他の領域 (研究教育支援)

2.5.1 評価項目毎の実績集計と分析

- 各種システムの開発に全教員が取り組んでいる。
- 各種システムの運用維持に全教員が取り組んでいる。
- 平成18年3月稼働のシステム仕様策定に関連して積極的な活動が行われた。
- 学外の研究会やセミナーへ参加し、情報収集が積極的に行われた。
- 半数の教員が、研究教育利用支援を自己評価した。
- 1名が、ネットワーク利用支援を自己評価した。
- 2名が、ネットワーク接続支援や地域情報化支援などの活動を自己評価した。
- 特記事項として、セキュリティー情報提供活動があった。

2.5.2 活動評価集計と分析

- 5段階評価の自己評価評点の平均は4.1であった。全教員がシステムの開発運用、様々な支援活動を行っている。

2.5.3 部局としての自己点検評価

- 全員がそれぞれの立場に応じた研究教育支援活動を行っており、評価できる。
- 業務負担の偏りが見られる。

2.6 教員の総合的活動状況に関する自己点検評価

- 少ない人数で、大学の情報基盤を担う業務を負い、全教員が活発に活動を行っている。
- 人数に対して業務が多く、研究教育が十分に行えていないだけでなく、業務そのものも十分に実施できなくなっているとのコメントが記載されている。
- 人員増と負担配分の見直しが必要である。

3 評価領域別の集計・分析と自己点検評価(技術職員分)

3.1 研究教育支援の領域

3.1.1 評価項目毎の実績集計と分析

- 半数の技術職員がシステム開発に取り組み、1名は成果発表を行っている。
- 全員が活発にシステム運用維持業務に取り組んでいる。
- 1名が、セキュリティー状況の調査活動を行った。
- 全員が、研究教育利用支援活動を活発に行っている。
- 全員が、ネットワーク利用支援活動を活発に行っている。
- 1名が、学部内情報化の支援活動を行った。
- 特記事項として、システム開発成果の論文発表、科研費応募、予算要求資料作成、利用者向けパンフレット作成、利用者向け情報提供など、多くの活動が記載された。

3.1.2 部局としての自己点検評価

- 5段階評価の自己評価評点の平均は4.2であった。全員が積極的に取り組んでいる。

3.1.3 部局としての自己点検評価

- 学総合情報基盤センターは小さな組織である一方で、全学の情報基盤を担うという重要な業務を負う組織である。従って、全教職員の積極的活動が不可欠である。

3.2 技術職員の総合的活動状況に関する自己点検評価

- 少ない人数で、大学の情報基盤を担う業務を負い、全員が活発に活動を行っている。
- 人員増や待遇改善など、活動を活性化させる方策が必要である。